

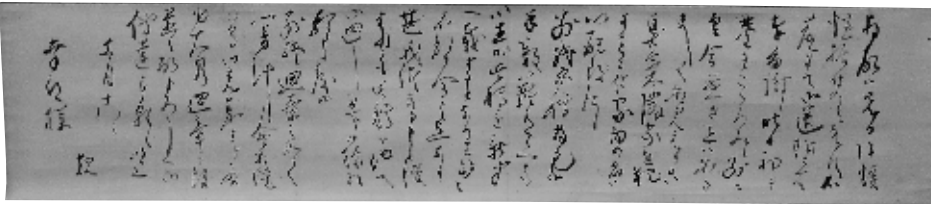
子規、四季を楽しむ仲間とともに

変化に富む日本の四季は、折々に様々な表情を見せます。子規は、春夏秋冬それぞれの季節によって姿を変える自然や風物に親しみ、旬の食べ物を味わうことなどを通して、四季を心から楽しみました。

体が元気で何事にも行動的だった青少年期の子規は、春には花見をし、夏には旅に出かけ、秋には紅葉狩りに行き、冬には雪の名所を訪れるなど、ある時は一人で、またある時は仲間たちとともに外の世界に出ていくことで四季折々の楽しみを満喫しています。晩年に病気のためほとんど外出が叶わなくなつてからは、東京根岸の自宅・子規庵の庭の草花が季節の変化にあわせて見せる姿から四季を感じ取ることが、子規の何よりの楽しみとなります。また、病床の子規のもとには門人や友人などの仲間たちから鉢植えや旬の味覚といった、季節を味わい楽しむことができるものも数多く持ち込まれています。こうした仲間たちの心づかいも、子規が季節を楽しむうえでのかけがえのないものでした。

子規は四季を楽しみ、その鋭い感性でそれぞれの季節を捉え、湧き上がるさまざまな感情を俳句や短歌、紀行文や随筆などの文学作品、また写生画などの絵画作品に結実させていきました。生きることと文学活動が強く結びついてきた子規にとって、四季を楽しむことで得られる感覚や感情なくしてその多彩な文学作品は誕生しなかつたと言えるでしょう。

今回の特別展では、子規と四季のつながりにスポットをあて、それぞれの季節を題材とした俳句や短歌、文章、絵画作品など、子規と季節の関わりを物語る資料を展示し、子規が四季を楽しむながら生きた姿を紹介します。



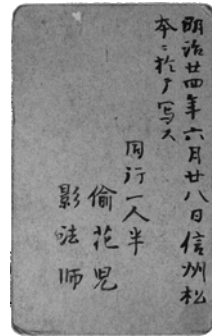
子規の伊藤左千夫あて書簡 (明治33年11月18日)



子規写真(表)
(明治24年6月28日)



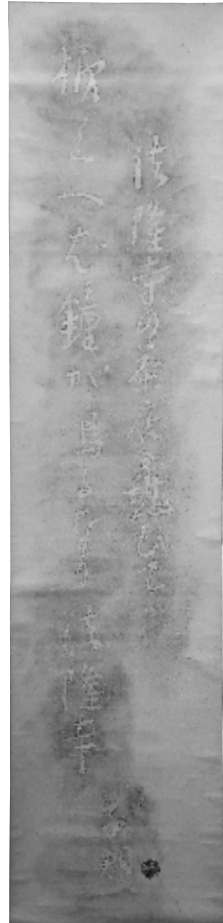
子規画「雛の図」(個人蔵)



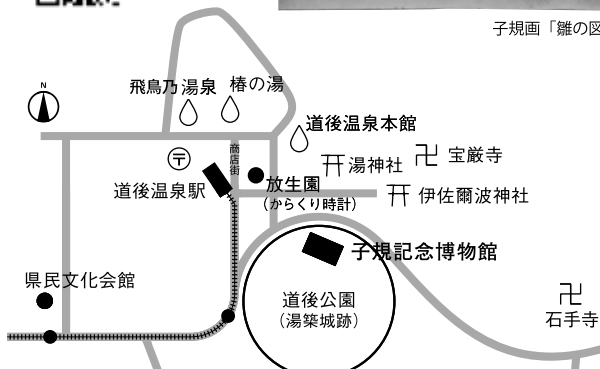
子規写真(裏)
(明治24年6月28日)



子規の加藤拓川あて書簡
(明治34年1月)



子規句碑拓本
「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」



道後温泉駅より徒歩約5分/道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください